

表紙作品解説



秋林泉石図(左) 飛瀑雪晴図(右) 双幅 跡見花蹊筆

各127.0×64.5cm

絹本墨画 跡見学園女子大学花蹊記念資料館蔵

秋林泉石図でまず目を引くのは、ひょろりと伸びた松などの樹木である。下には屋根らしきものがあり、人の気配を感じる場所である。足元の岩と平行するかのよう、中景には泉から湧き出た穏やかな水の流れがある。

一方、飛瀑雪晴図はその名の通り、一面の青空のもと、堂々と流れる瀑布を描いている。奥には雪に覆われた山々が連なっており、画面左には大きくせり出した威容の山肌がそそり立っている。手前の雪を戴いた枝から広がる空間からは、森閑とした冷たい空気が伝わってくるようである。

二つの作品は、それぞれ秋と冬、作者の視点は、近景と遠景を表現している。各々の景色の由来は明らかではないが、これらは私たちにとってどこか見覚えのある親しみ深い日本の原風景である。

自然の中に分け入ったとき、突然周囲の空間が開け、その雄大さに心を打たれた経験を持つ人は少なくないだろう。跡見花蹊は、画面上最も印象的な要素だけを大胆に配し、余白を絶妙に残すことで、普遍的で偉大な自然の姿をとらえている。